

《思い思いの若者たち》

不登校生の本意を傾聴してみよう

顧問 布袋 太三

『IN/SECTS』という少し風変わりな雑誌を見たことがあるだろうか。その最新号が「不登校」特集を編んだ。

いわゆる専門家や学者たちの語りを省き、当事者としての生徒自身やその保護者たちの生身の言葉をひたすら丹念に拾い集めた。

表紙をめくると、まずは生徒のいないガラとした教室や廊下の写真が数ページ。続く中身は通読すると、時に軽く、時にやや執拗に思考の深みを覗かせてくれたりする。また「学校を考える映画 100 選」「不登校から広がる短歌の世界」の長めのコラムもあり、不登校本にしては異彩を放って実に面白い。

ところで「小中学校の不登校生約 35 万人」という活字がメディアに躍ったことを覚えている人は多い。そして、その時なぜこんなにも多いのかと誰もが思ったと思う。

この雑誌で不登校生の一人は「どうしても分からないけれど、毎回足がすくむ感覚なんです。体が拒否をして、足が硬直するような…。何かに怯えてというか…。でも学校が嫌いなわけでもなく、行けない自分が悔しくて泣いていました…」と語っている。

小中学生が恐怖や不安で足がすくむ学校とはなんなのだろう。こんなことに周囲の大人は本当に気づかなかったのか。ひょっとして、肝心の先生方もちゃんと気づいていないとすれば、不登校生の発する悲痛な心の声など誰にも受け止められず、宙にさまようばかりなのかもしれない。なんとかならないものか。

ある保護者は「学校に行きづらい子たちが心も体も本当に行きたいと感じるような、学校や学びの場とはどんなかたちなのか。それぞれの住む場所で見つけていく必要がある」と語った。そろそろ学校は本気を出して、こうした声に応えていくべきだと私は強く思う。

さて、この雑誌に著名な書き手は登場しないが、作家の瀬尾まいこだけが小品を載せていた。こどもの頃の彼女は学校が随分苦手だったらしい。そんな彼女が必死になって中学教師になった。そこで、彼女は「学校というところは気づきにくいけれど、手を差し伸べてくれる人が必ずいる場だ。休んだっていい。何度も失敗したっていい。いろんなことが許され、自分を試せる場でもある」と今更のように青々しく独白していた。

私もずっと昔からそう思い続けている。学校こそは先生方の創意と熱意をうまく集めさえすれば、すぐにでも、こどもらの楽しい砦に変身できるはずだと私は今でも確信している。

スタッフ紹介



木村 慎也

4月より入職し、若者サポートステーション With You 南紀・ひなたの森で相談支援員として勤務しています。周りの先輩方や通ってきてくださっている方たちに色々教わっている毎日です。通ってこられる方と社会へ出ていく一歩になれるような時間を一緒に過ごしていきたいと思っています。まだまだ至らない点があると思いますが、どうぞよろしくお願いいたします。



森知子

4月から若者サポートステーション With You 南紀で働いています。人に助けられてばかりの人生でしたが、これからは困っている人の役に立ちたいという想いが強いです。何かお手伝いできることはないか、どうすれば良い方向に行くのか、一緒に探していけたらと思っています。まだまだ分からないことばかりですが、どうぞよろしくお願いします。



堂瀬 翠

5月から就労準備支援員として働いています。6月には1ヶ月間、利用者さんとともに、キャラバン・サライ様のお弁当販売に行かせていただきました。開店準備から接客を経験してもらい、少しでも就労に近づけていければと思います、サポートいたしました。

利用者さんの気持ちに寄り添いながら、信頼関係を築き、一緒に一つ一つ課題をクリアし不安を取り除きながら、就労に繋がれるお手伝いが出来たらと思っています。自分自身も不慣れなので、一緒に成長しながら頑張りたいと思っています。どうぞよろしくお願い致します。



田中 結麻

4月よりあづまプラッツにて相談支援員をさせていただいております。周囲の大切な人々に困り事があるとき、少しでも力になれるようになりたい。その想いが強く、勉強を始めました。民間ではありますが3つの資格を取得する中で更に考えが広がり、このことを仕事に活かせたらと思うようになりました。誰もが誰かの大切な人であり「心から笑顔で暮らす未来」を目指す権利があります。この場所が何らかの形でその助けになれるよう、日々尽力してまいります。